

「武
唐
平
成」

「文」第八十三号 抜刷
元年十月二十五日 発行

and similar papers at core.ac.uk

治本 明治三十八年秋
金沢における詩文交流

柴
田
清
継

王治本 明治三十八年秋

金沢における詩文交流

柴 田 清 継

はじめに

明治（以下、誤解を招く恐れのない場合は「明治」を省略する）三十八年の秋から冬にかけて、当時横濱に住んでいた王治本（号泰（漆）園。一八三五～一九〇八）は二十数年ぶりに加越能地方及び越前を訪れた。その行程は、九月五日に金沢に到着して一か月間足らず滞在し、同月三十一日に富山へ移動して一か月餘り滞在し、十一月三日にいったん金沢に戻った後、七尾へ足を延ばし、同月二十五日に再び金沢に戻って滞在し、十二月一日に福井へ移動してしばらく滞在した後、年内に福井を発って名古屋へ向かうというものであった。この時の彼の足跡は、金沢在住の細野申三や山田天籟が富山や福井まで彼に同行している点に特に顕著に表れているように、ひとつらなりのものであるから、地域（加賀・越中・能登・越前）別に切り離すと描述するのに些かの支障が生ずるのであるが、紙幅の制約があるので、本稿では、彼の金沢における詩文交流の様子を紹介するにとどめ、それ以後の事柄については次稿で取り上げることにした。

関連する研究としては、さねとうけいしゅうが一九六五年に発表した「王治本の金沢での筆談」があるが、これは主に十五、十六年の最初の訪問について述べたものであり、三十八年のことについては、十五年にも交流した山岸千吉と王治本との筆談資料が紹介されているだけである。²

一、九月五日来沢

三十八年九月五日の『北國新聞』に次のような記事が載っている。

王治本氏の再遊 豫ねて二十年振にて北陸地方に再遊を試むるならんと嘖ありたる知名の清儒王漆園氏は市内同好家の招請に依り愈本^{ママ}日午零時五十二分当駅着の汽車にて来沢、殿町細野申三氏方に暫時滞在し詩文書の依頼に応ず可しと、氏は七十一の高齡なるも尚ほ鏗鏘、壮心止まざるの概あり今や詩文書共に老熟の境に達し頗る見るべしと云へば依頼者も随分多きことならん、聞く処に依れば潤規は固より何等の定めなしと云ふ

王治本を自宅に宿泊させることになった細野申三（一八七二～一九六一）は、燕臺と号し、酒造業等の商売を営むかたわら、多面にわたり風雅の世界に遊んだ人である。³ 細野申三については後で再び触れることにする。

二、九月六日 佐々木魁心宅訪問

九月七日の『北國新聞』に「王泰園^{ママ}詞宗の近什」との見出しの下、「市内殿町希仙閣（細野申三氏方）に滞在中の清客王治本氏は昨日刀圭家佐々木魁心氏を訪ひ左の一絶を賦したり、今録して同好家に示すと

云爾」として、次の詩が掲げられている。

乙巳秋仲游次加州訪魁心先生医室偶成一絶以誌企仰

羨是先生三折肱 羨むらくは是れ先生 三たび肱を折り〔良医

であるの意〕

靈枢旧学世相承 靈枢〔医書、医方〕の旧学 世よ相承けたる

こと

藥爐煙燼間無事 藥爐 煙燼〔燃え残りの煙〕 間〔ひっそりと

している〕にして事無ぐ

悟入詩禪最上乘 悟入す 詩禪 最上乘

佐々木魁心（一八四二―一九一六）は、近藤修之助編『明治医家列伝』

第四編所収の伝⁴によれば、大聖寺の生まれで、名は順太郎、後に秀三郎と改めており、実名は義祥で、魁心はその号。「十一年四月東京ニ来り浅田翁ノ門ニ入り両替町博濟院当直医トナリ専ラ実地研精ノ事ニ従^い」、「全十五年二月国ニ帰り金沢市ニ博濟病院分院ヲ創設シ（中略）院長トシテ救治ノ事ニ勉^めたという。ここに見える「浅田翁」とは、幕末から明治にかけて漢方医として活躍し、かつ儒学者でもあった浅田宗伯（一八一五―九四。号栗園）のことである。王治本は遅くとも十一年ころから宗伯とかかわりがあった⁵。から、その縁故によってだろう、詩文交流上の証左は確認できぬものの、十五、十六年の金沢訪問時にも二人の面会はあったようである。金沢市玉川図書館近世史料館に彼の『帰韻三十韻、魁心二十八字詩附淡水集』が収蔵されている⁷。この稿本は、「帰韻三十韻」（Aと称す）、「魁心二十八字詩」（Bと称す）、「淡水集」（Cと称す）の三

部分から成る。Aには、王治本の次のような総評が付されている。

三十首、好句疊出、妙趣横生、全從性情中自然流出、落々大方、不事矜奇、而無不奇妙、其佳句髣髴青邱。（三十首、好句 疊出し、妙趣 横生し、全く性情の中より自然に流れ出で、落々大方として、奇を矜るを事とせず、而も奇妙ならざるは無く、其の佳句は青邱に髣髴たり。）

Bではその一首「寄遠」に王^マ泰園の評が付されている。Cは他人の詩を集めたもので、王治本の作は、上引のものを含め、三首収められている。他の二首を挙げておこう。

魁心佐々木先生囑

有道難行不如醉 道有るも行い難ければ 酔うに如かず
有口難言不如睡 口有るも言い難ければ 睡るに如かず
先生醉臥此石間 先生は此の石間に酔臥せり
萬古無人知此意 萬古 人の此の意を知る無し

魁心仁兄大国手先生雅属

猿啼虎嘯駭人聽 猿啼き 虎嘯^はえ 人聽〔人の耳〕を駭かす
衆醉何妨我独醒 衆酔えるも 何ぞ妨げん 我独り醒めたるを
読罷南華無一事 南華〔『莊子』〕を読み罷えて 一事無く
明窓靜坐写黃庭 明窓に靜坐して 黃庭〔道教經典としての医

書『黃庭經』を写す

いずれの作も、「浅田宗伯の門流の一人」で、「儒教・仏教に厚い

正義の人で、時代にあくまで抵抗し、伝統医学に殉じ」⁸た漢方医、魁心の人柄や日常をよく描き出していると見えよう。なお、魁心は三首の後に、

王^マ黍園明治乙巳再遊吾金沢臨去賦留別七律二首以贈余余珍藏久一日為某生被持去故今不得記載實為遺憾。「王黍園は明治乙巳、再び吾が金沢に遊び、去るに臨んで留別の七律二首を賦し以て余に贈りぬ。余珍藏すること久しかりしも、一日 某生に持ち去らる。故に今 記載するを得ず、実に遺憾なりと為す。」

との識語を付している。

三、九月六日 希仙閣雅集

九月十二日の『北國新聞』には、「希仙閣雅集 其一」として、「乙巳中秋前七日漸東黍園老人王治本叙」との識語のある、李白の「春夜宴桃李園序」を彷彿とさせるような四六駢儷文体の文が掲載されている。「乙巳中秋前七日」は三十八年九月六日であるから、この日、王治本は昼間に佐々木魁心宅を訪れた後、夜、この雅集に参加したと見ればいだろうか。希仙閣とは、上引の九月七日の『北國新聞』の記事から分かるように、細野申三の自宅である。『北國新聞』は、この日から十五日の「其四」まで連続で、「希仙閣雅集」と銘打って、十数人の人物による詩詞の作品を掲載し、最後を山田天籟の「希仙閣雅集巻跋」で締めくくっている。したがって、九月六日、またはこの日を初日として複数日にわたって、細野宅の詩会で賦された漢詩文が一つにまとめられて、細野宅かもしくは他のどこかに保存さ

れることになったのではないかと想像される。本節では、この雅集での作品を紹介したい。

まず、王治本の叙を掲げておこう。

蓮沼茶山、此地擅煙霞勝景。酒杯詩卷、吾儕亦風月主人。況時当桂魄初円、余適槎游重到。恰好臨流作賦、還宜醉月飛觴。續翰墨之良縁、脩琴書之樂事。燈紅酒碧、少長咸來。桂馥蘭芳、賓朋共賞、始而拈韻、繼而聯吟、終而集句。其得詩二十餘篇。（中略）得茲一夕豪游、用博千秋佳話。是為序。（蓮沼茶山、此の地は煙霞勝景を擅にす。酒杯詩卷、吾儕も亦風月の主人なり。況や時に桂魄初めて円かに、余適たま槎游して重ねて到るに当たるをや。恰も流れに臨みて賦を作るに好く、還た月に酔い觴を飛ばすに宜し。翰墨の良縁を續ぎ、琴書の樂事を脩む。燈は紅に酒は碧に、少長咸來る。桂馥蘭芳、賓朋共に賞し、始めにして韻を拈り、繼ぎて聯吟し、終わりにして句を集む。其の詩を得ること二十餘篇。（中略）茲の一夕の豪游を得て、用て千秋の佳話を博えたり。是れを序と為す。）

この叙の後、①王治本の「分韻得佳」と題する五律二首、②萩野迦陵の「同得寒」と題する七律一首、③王治本の「次韵迦陵子」と題する七律一首、④萩野迦陵の「再疊韵呈黍園先生」と題する七律一首、⑤王治本の「再和迦陵子」と題する七律一首（以上、十二日所載「希仙閣雅集其一」、⑥佐々木魁心の「分韻得刪」と題する五律一首、⑦瀬野寒林の「同得先」と題する七律一首、⑧小池梅処の「同得文」と題する七絶一首、⑨山田天籟の「同得灰」と題する七絶一首、⑩山田天籟の「集杜」（杜詩からの集句）と題する七絶一首、⑪渡

辺牧野の「同得元」と題する七絶一首、⑫広岡尾山の「同得歌」と題する七律一首、⑬大西金陽の「同得陽」と題する七絶一首（以上十三日所載「希仙閣雅集其二」）、⑭「儼栢梁体」と題する聯句、⑮「再儼栢梁体」と題する聯句、⑯「集唐聯句儼栢梁体禁用同人成句」と題する聯句（以上、十四日所載「希仙閣雅集其三」）、⑰細野申三の「乙己重陽、燕臺雅集、此日王治本先生來会、適香国花史遠遊、後調故及」と題する「永遇樂」詞、そして最後に上述の⑱山田天籟の「希仙閣雅集卷跋」（以上、十五日所載「希仙閣雅集其四」）で結ばれる。

（一）王治本と山田天籟との関係、及び王治本の金沢再訪のいきさつ

以上の詩文のうち、⑱にその著者山田天籟と王治本とのこれまでの関係、王治本がこのとき金沢を訪問することになったいきさつなどが述べられているので、最初に見ておきたい。

⑱ 希仙閣雅集卷跋

是巻為希仙閣雅吟篇。頃者奈園先生、重游金沢、因細野春隱、与先生有旧、遂得借寓于希仙閣。一夕置酒招賓、煎茗分韵、席間得長短句若干首、洵一時之韵事也。憶余自叩角時、執贄先生之門。其後或從事崎陽、或遠游臺北、聚散無常、而心交益深。今夏余自金沢往横浜、過謁先生寓、鶴髮童顏、老而益健。先生謂余曰、二十年前、金沢旧交、猶有存乎。擬將重作一游。余憊湊之。閱月果携囊來游。小池梅所・佐々木魁心・大西金陽、皆當年旧雨也。其餘多属新知。雖少長不齊、而詩酒徜徉。要皆風雅之士焉。先生曩年北游、曾有贈答詩帖、藏於余篋。出而一閱、可与此卷先後相証。但帖中人多物故、未免動今昔之感耳。聊誌

数行、以表葵向云爾。（是の巻は希仙閣の雅吟の篇なり。頃者奈園先生、重ねて金沢に遊び、細野春隱¹⁰が先生と旧有るに因り、遂に寓を希仙閣に借るを得たり。一夕置酒して賓を招き、茗を煎て韵を分かち、席間長短句若干首を得たるは、洵に一時の韵事なり。憶えば余は叩角の時より、贄を先生の門に執りぬ。其の後或は事に崎陽に従い、或は遠く臺北に遊び、聚散常無かりしも、心交は益ます深し。今夏余金沢より横浜に往き、先生の寓に過謁するに、鶴髮童顏、老いて益ます健やかなりき。先生余に謂いて曰く、「二十年前の、金沢の旧交は、猶お存する有りや。重ねて一游を作さんと擬將¹¹す」と。余之を憊湊す。月を閲て果たして囊を携えて来游せり。小池梅所・佐々木魁心・大西金陽は、皆当年の旧雨なり。其餘は多く新知に属す。少長齊しからずと雖も、詩酒徜徉す。要するに皆風雅の士なり。先生曩年北游し、曾て贈答の詩帖有り、余が篋に藏せり。出だして一閱するに、此の巻と先後相証す可し。但帖中の人多く物故し、未だ今昔の感を動かすを免れず。聊か数行を誌し、以て葵向¹²を表すのみ。」

明治乙巳仲秋 天籟学人山田重光拜譚

天籟は、『百花欄』第十一集¹²の「作家姓氏」では、名が重光、字は儀卿、一字伯敬、文久三（一八六三）年生まれで、東京の人となっている。天籟の幼少時については、彼の作「王母広道孺人墓表¹³」がいくつかの情報を提供してくれる。この文によれば、彼は祖母が没した六年後（明治九年）に「笈を負いて東都に來り、又三年にして贄を恕軒先生に執¹⁴ったという。そのころ住んでいたのは「駿河静岡」

とされている。上京して三年後に信夫恕軒（一八三五—一九二〇）に入門した¹⁴。上記の跋文には「余自叩角時、執贄先生之門」とあるが、三十八年十二月十日の『政教新聞』（金沢発行）所載の王治本の「題北游贈別陰冊」と題する一文に付された天籟の「余從游黍園翁、已二十五年」という識語によるなら、天籟は十三年ころ、すなわち十七歳の頃から王治本に弟子入りしていたことになるから、彼は信夫恕軒に次いで、王治本の門下生にもなったということになる。天籟の経歴について多くの情報を提供してくれる今一つの資料は、平井参（号魯堂。一八五八—?）の「天籟文集序」¹⁵であり、そこに次のようにある。

予与儀卿、俱徳川氏麾下士也。予与儀卿、同師俱学者也。予与儀卿、迺遭坎坷、不得志於世者也。（中略）儀卿嘗奉職於長崎県師範学堂、二十七八年役起、乃為訳官、従軍台湾、尋為澎湖島庁佐、亦不得意、終辞官入横浜火險公司、為金沢支應長。是歲春遇病辞職。（予と儀卿とは、俱に徳川氏麾下の士なり¹⁶。予と儀卿とは、師を同じくして俱に学びし者なり。予と儀卿とは、迺遭坎坷、志を世に得ざる者なり。（中略）儀卿は嘗て長崎県師範学堂に奉職し、二十七八年の役起るや、乃ち訳官と為りて、台湾に従軍し、尋で澎湖島の庁佐と為るも、亦意を得ず、終に官を辞して横浜火險公司に入り、金沢支應長と為る。是の歳の春、病に遇いて辞職す。）

また、天籟が長崎で交遊した深浦重光（龍江）の『龍江文集』上巻¹⁷に天籟の序があり、そこに「歳壬辰、承乏長崎師範学校、一日、有人投刺、相謁延見、則深浦重光龍江也。（中略）明治己亥十一

月 東京 山田重光拝撰」とあるのにより、彼が長崎師範学校に赴任したのは二十五年であつたことが知られるが、一方、同書巻三「龍江詩集」所載の四十一年か四十二年の作と見られる詩に「弔山田天籟兄、兄往年奉職我県師範、時与余相交、居数年、東帰、従事横濱火災保険会社、今茲二月、初三、接其計、因賦小詩以弔焉」との序があることにより、そのころ逝去したことが知られる。享年四十五、六歳ということになる。

ここで再び天籟執筆の跋に戻れば、三十八年当時、横浜火災運送信用保険会社¹⁸の金沢支店長の任にあつた彼が、本社がある横浜へ赴いた機会に、そこに住む王治本を訪ねたことがきっかけで、王治本の金沢再遊が実現することになったのである。以上のような王治本とのかかわりを踏まえて見るならば、天籟の⑨と⑩の作品に対する理解が深まるであらう。

⑨ 同 得灰

雨餘漠漠暮雲開

雨餘 漠漠（雲の濃い様）として 暮雲開がる

節近中秋雅会催

節 中秋に近く 雅会催さる

别有吟情添我感

別に吟情の我に添いて感ぜしむる有り

三千里外老師来

三千里外 老師 来る

⑩ 集杜

秋尽東行且未回

秋尽くるも東行して 且つ未だ回らず

殊方又喜故人来

殊方 又喜ぶ 故人の来るを

不辞萬里長為客

辞せず 萬里 長く客と為るを

ママ
僚倒新停濁酒杯¹⁹

僚倒 新たに停む 濁酒の杯

なお、天籟は三十七年来沢後、金沢を離れる三十九年夏²⁰まで『政教新聞』の「文苑」を担当していたようで、その間、多くの自作を王治本の評とともに掲載している。

(二)金沢地元詩人たちとの唱和

次に山田天籟以外の人物の作品を取り上げてみることにしたい。

- ②③④⑤は荻野迦陵と王治本との唱和の作品となっている。まず、②の詩句を挙げよう。

②同得寒 荻野迦陵

庭樹如山庄画蘭 庭樹 山の如く 画蘭〔美しく彩った欄干〕

を圧す

林泉城市且同看 林泉 城市 且く同に見ん

留君九日賞佳節 君を留め 九日²¹〔重陽節〕 佳節を賞するも

唯我一人羞冷官 唯我一人 冷官を羞す

盆菊有情開口笑 盆菊も情有り 口を開きて笑い

鐘花著意吐心歛 鐘花も意を著け 心〔燈心〕を吐きて歛ぶ

書生老去才思退 書生 老い去りて 才思 退きぬ

誰復当年王子安 誰か復た当年の王子安〔王勃のこと〕ならん

荻野迦陵については、稲葉昭二氏がその著『郁達夫——その青春と詩』²²の中で、達夫の兄、郁曼陀（一八八四—一九三九）が早稲田大学在学中の四十年に交際した人物として、

荻野迦陵は随鷗吟社社員で、大正五年二月二十日付の社員名簿にも「本郷区」の項に「湯島新花町三九」と住所が記載されており、森槐南を始めとして槐南門下の詩人たちの詩集や『随鷗集』にしばしばその名を見るのであるが、出身地と思われる金沢では現在までのところ一片の消息もつかめていない。

と述べておられるが、筆者もそれ以上の情報は得ることができていない。ただ、この詩の第四句に自ら述べるところよれば、「冷官」に甘んじていた人物のようで、王治本との唱和は主にこの点をめぐって展開されている。②を承けた王の③は、その第四句に「偶得佳吟勝得官（偶たま佳吟を得なば 官を得るに勝る）」とあって、迦陵の「冷官」もしくは「無官」を慰めようとしている。これを承けた迦陵の作は、次のようなものである。

④再疊韵呈泰園先生 迦陵

関山西望醉憑欄 関山 西を望みて 酔いて欄に憑り
世事悠悠袖手看 世事 悠悠として 手を袖にして看る

〔傍観する〕

五柳餘風長在野 五柳〔陶淵明のこと〕の餘風 長く野に在り

三槐遺種却無官 三槐の遺種 却って官無し

聯床邂逅渾如夢 聯床 邂逅 渾て夢の如く

剪燭呻吟亦足歛 剪燭 呻吟 亦 歛ぶに足る

不害天涯同賞月 天涯 同に月を賞するを害わざるも

秋悽落葉滿長安 秋悽^{さむ} 落葉 長安に満つ

第四句の「三槐遺種」とは、宋の王祐が手ずから三本の槐を庭に植え、「我が子孫にきつと三公となる者が出るだろう」と言ったところ、果たしてその子が宰相となり、天下に三槐王氏と呼ばれたという故事（邵伯溫『聞見前録』巻八）に基づいており、この故事により、「三槐」は王氏の代名詞とされるようになって²³いるから、句全体として王治本の「無官」を表現していると見られる。迦陵はこの句を、自身の生き方を表現した第三句と対にすることによって、王治本への共感を表明し、詩の後半で同じような身の上の二人が邂逅したことの喜びを詠っているのである²⁴。

これを承けたのが、王治本の次の作である。

⑤ 再和迦陵子

黃華欲放近秋闌	黃華	放 <small>さ</small> かんと欲し	秋闌なるに近し
期約淵明竝坐看	期約（約束）	す	淵明と竝び坐して看ん
羈客欣逢宵有月	羈客	逢うを欣ぶ	宵に月有ること
驕人最好我無官	人に驕る	最も好きは	我 官無きこと
平安每藉鴻傳信	平安なれば	毎に鴻に藉りて信を伝え	
潦倒還憑酒合歡	潦倒なれば	還た酒に憑りて歡を合す	
到老豪游游未倦	老ゆるに到るまで豪游せん	游	未だ倦まず
僊踪隨處訪劉安	僊踪	隨處に劉安を訪ねん	

第四句に「坡公句行樂最好在無官六月驕人誇第一」との自注があるが、これは蘇東坡ではなく、真夏に役人の正装をして暑さに苦しむ必要のなくなった解放感を歌った、袁枚の「銷夏詩」の「不著衣冠近半年、水雲深处抱花眠。平生自想無官樂、第一驕人六月天。」（衣

冠を著けざること半年に近く、水雲深き処花を抱いて眠る。平生自ら想う無官の楽しみ、第一人に驕る六月の天。」を下敷きにした表現と思われる。末句の「劉安」は、言うまでもなく、漢の皇族で実在した人物だ（前一九九―二二三）が、この人物にまつわる伝説の一つに、仙人となつて昇天したというもの（『論衡』道虚篇）があるのにより、ここでは仙人として扱われているものと考えられる。

次に瀬野寒林の作を挙げておくが、この人物については何ら情報を得ることができていない。

⑦ 同 得先

南船北馬幾經年	瀬野寒林
擺脱世間塵俗縁	南船北馬 幾たびか年を経て
交跡何論新旧友	世間 塵俗の縁を擺脱したる
閑情最好雨晴天	交跡 何ぞ論ぜん 新旧の友
開懷傾尽酒三斗	閑情 最も好し 雨ふりて晴るる天
乘興揮成詩百篇	懷を開き 傾け尽くす 酒三斗
相勸吟筇容少住	興に乗りて揮い成す 詩百篇
中秋共賞月嬋妍	相勸む 吟筇 少しく住まるを容れよ
	中秋（この年は陽暦の九月十三日） 共に賞せん
	月の嬋妍たるを

⑧、⑪は、筆者が利用した『北國新聞の』マイクロフィルム資料に判読したい箇所がある²⁵ため、引用はしないが、作者について若干の言及をしておきたい。小池梅処（所）（一八三二―一九一三）は、王治本の十五、六年の金沢訪問時にも交流した人物であるが、前稿での取り上げ方はやや不十分であったかもしれない²⁶。あらた

めて畑中榮氏の研究成果によつて補足するならば、「通称豊作・伯藏、諱常行・行」で、「金澤の御徒町に住み、上海にも遊歴して南宋文人画を能くし、篆刻も能く」した²⁷。渡辺牧野は『百花欄』第二十二集²⁸に作品が載っており、同誌の「作家姓氏」に「渡辺雄三郎字子健」とある。筆者がたまたま閲覧した三十八年一月から三十九年九月にかけての『政教新聞』文苑には、かなりの頻度でその作品が掲載されている。

⑫「同 得歌」を詠んだ広岡尾山は、王治本が最初の新沢訪問時に交流した人物の一人だが、前稿での取り上げ方が不十分であったと思われる²⁹ので、彼の著『尾山詩稿』³⁰所載の畏斎赤井直好大正十三年四月撰の序を引用することにより、補足しておきたい。

尾山書家也。（中略）尾山少好書、学積懷素、乃簪筆入鼎脍、後去之甲府、転之岡山、更徙東京、終告老帰郷。（尾山は書家なり。（中略）尾山は少くして書を好み、積懷素を学んで、乃ち筆を簪して鼎脍に入り、後に去りて甲府に之き、転じて岡山に之き、更に東京に徙り、終に老を告げて帰郷す。）（下略）³¹

王治本来沢の十五年と三十八年、いずれも金沢にいたわけで、それぞれが彼の一生のうちのどのような時期であったかは未詳だが、いずれにせよ、書道の実力により人生を送った人であるようだ。

さて、第一首は、

別後悠々愁緒多 別後 悠々として 愁緒多し

欲君此地見重過³²

燕臺文物異前度

欲ぶ 君 此の地に重ねて過れるを見るを
燕臺〔金沢の雅称〕の文物 前度〔前回〕に
異なれり

借問劉郎感奈何

借問す 劉郎 感ずること奈何³³

というもの。第二首には判読したい字が三つあるが、その箇所を『尾山詩稿』で補えば、次のようになる。

七十春風鬢不皤

七十 春風 鬢 皤³⁴からず

仙山重唱采芝歌

仙山 重ねて唱わん 采芝の歌³⁴

詩名噴噴放翁似

詩名 噴噴（口々にほめそやすさま）として
放翁³⁵に似たるも

鶴算比来猶未過

鶴算〔長寿〕比べ来れば 猶お未だ過ぎず

⑬「同 得陽」を詠んだ大西金陽は、十六年には王治本とともに能登の七尾湾に宿泊した画家である³⁶。金陽の作は次の通り。

且对南山酌一觴

且く南山に対して 一觴を酌まん

蕭々風雨近重陽

蕭々たる風雨 重陽に近し³⁷

希仙閣上逢仙客

希仙閣上 仙客に逢い

筆底花開暗送香

筆底 花 開き 暗に香を送る

希仙閣雅集では聯句も行われた。⑭⑮⑯がそれらであるが、⑭と⑯を挙げることにしよう。

⑭ 傲栢梁体

夢 覚 希仙 半夜の天 梅処
 笑談 湧くが如し 一樽の前 尾山
 詩客の狂情 晋賢（竹林の七賢のことだろう）
 に比す

費 尽 腰纏萬貫 錢 天籟
 楊州騎鶴孰先鞭 楊州にて鶴に騎るに 孰か鞭を先んぜん 迦陵

臙脂半褪怨秋千 臙脂 半ば褪せて 秋千（過ぎ去る青春ほどの意か）を怨む 申三

明朝更上米家 ● 明朝 更に上らん 米家 ●³⁸ 牧野

陰雲散尽月嬋妍 陰雲 散じ尽くして 月 嬋妍たり 金陽
 無復一織塵世縁 復た一織も塵世の縁無く 寒林

箇中情興勝遊倦 箇の中的情興 遊倦に勝る 泰園

第四、五句は、(数人が集まり、それぞれその望みを語ったが、高官になりたいと言う者、金持ちになりたいと言う者、鶴に乗って天に昇り仙人になりたいと言う者があった。すると、これを承けて、自分はその三つをみな実現したいと言う者があった) という南朝梁の殷芸の『小説』(『淵鑑類函』鳥・鶴三所引) 所載の故事による表現であろう。第七句の末字は、韻から推して、「船」であるに相違ない。「米家船」とは、北宋の書画家、米芾が書画を載せて江湖を遊覧するのに乗った舟ということから、後に米芾の書画という意味も帯びるようになった³⁹。

⑬は唐詩からの集句による聯句で、他者が取り上げたのと同じ一詩

人の句を用いてはならぬとの制約の下で行われた。

⑯ 集唐聯句傲栢梁体禁用同人成句

九月九日望鄉臺 王子安 魁心

此日登臨曙色開 崔曙 華陽

江東行客心悠哉 羅隱 天籟

前度劉郎今復來 韋応物 金陽

潦倒新停濁酒杯 杜甫 寒林

石上題詩掃綠苔 白居易 迦陵

年少王孫有俊才 馮延巳 申三

碧水東流至北迴 李白 梅所

夢後城頭曉角哀 顧況 泰園⁴⁰

第二句を受け持った華陽は、三十八年五月十八日の『北國新聞』所載の「聴松閣の一瓢会」という見出しのある記事に、主人北方心泉の檄に応じ、尾山（広岡）・牧野（渡辺）・申三情仙（細野）らとともに参会した面々の一人として「華陽（広谷）」と記されている、広谷という姓の人物であろうと思われるのみで、それ以上の情報はつかめていない。

この聯句の末尾には、王治本の「一夕華筵百篇佳詠較之蘭亭会上猶過之無不及也足見燕臺詩人之盛。（一夕の華筵、百篇の佳詠、之を蘭亭会上に較ぶれば、猶お之に過ぐるも、及ばざる無きなり。燕臺の詩人の盛んなるを見るに足る。）」との識語がある。

最後に、細野申三の作品を見ておこう。彼の「小学校時代の友達で」あった徳田秋声によって「学者であつた父は、氏を五香屋休哉⁴¹と

いふ支那文学の大家の許へ送つて、詩文稗史詞曲を学ばしめた。(中略)就中詞曲は氏の尤も得意とするところで「あつたと回顧されている⁴²通り、申三は日本人には珍しく、詞を賦することのできるユニークな人だった⁴³。上掲の「集唐聯句」で、申三のみ唐代の人物とは見なし難い馮延巳(九〇三〜九六〇)の詞句をわざわざ選んでいるところにも、その辺のこだわりが表れているようである。^⑪も詞で、次のような作品である。

⑪ 永遇楽 細野申三

乙己重陽⁴⁴、燕臺雅集。此日王治本先生来会。適香国花史遠遊。後調故及。

高樹涼帰

高樹 涼 帰り

小楼暑退

小楼 暑 退く

雁声何処

雁声は何れの処ぞ

雲影羅輕

雲影は羅のごと輕く

霜華珠綻

霜華は珠のごと綻^{はじ}け

叢菊盈秋圃

叢菊 秋圃に盈つ

清樽傾尽

清樽をば傾け尽くし

頽然昏醉

頽然として昏醉す

恰好斜陽将暮

恰好も斜陽 将に暮れんとし

一縷幽香侵醉夢

一縷の幽香 醉夢を侵し

別饒風流情緒

別に風流なる情緒 饒なり

重陽佳節

重陽の佳節

登商⁴⁵盟約

登商の盟約

况有遠来仙侶

况や遠来の仙侶有り

曲引涼颺

曲は涼颺を引き

歌翻落葉

歌は落葉を翻すをや

莫把良晨誤

良晨をば誤る(虚しく過す)莫かれ

羣賢畢集

羣賢 畢く集い

高朋滿座

高朋(高尚な友) 座に満てり

独少花史旧雨

独り花史旧雨のみを少く

如此華筵君未到

此くの如き華筵に 君 未だ到らず

惆悵如許

惆悵すること許くの如し⁴⁶

末尾に王治本の「柔情如訴、雅韻欲流、頗得耆卿風調(柔情訴うるが如く、雅韻 流れんと欲し、頗る耆卿⁴⁷の風調を得たり)」との評があるが、典雅な語句を連ねながらも、最後はせつかくの「華筵」に参加しなかった、王治本の「旧雨」である香国花史に対する不平・皮肉でケリをつけているだけといった印象が拭えない。

ここで香国にも言及しておきたい。香国は、言うまでもなく、土佐出身の土居通豫(一八五〇〜一九二二)の号。明治八年、元老院権中書記となったが、十年(または九年九月)、高知県属官となつて以来、徳島・京都・秋田等の地方官職を務めて功績あり、二十三年末に通信省に入り、名古屋、金沢の電信局長から二十八年八月、軍事郵便兼陸軍電信提理に任じ台湾に赴き、三十年九月、帰国した。その後、三十六年四月から同年十二月までは金沢郵便局長の職にあり、東京郵便電信局長を最後に官界を退いた⁴⁸。香国自身の筆に成る『隨鷗集』第四十四編⁴⁹「風雅餘誌」所載の「彰園老人逝く」の記事に拠れば、香国が大阪の立憲政党新聞社にいた十五年の頃、王治本が香

国を訪い、「相携へて南地の千福樓に飲し、倡和をな」したという。また、三十八年の香国の金沢滞在は、「隱棲」であつたという。彼が希仙閣雅集に欠席したのは、三十八年十月七日の『北國新聞』所載の彼の詩の「乙巳中秋予偶游能州（以下略）」という題から見て、能登への旅行に出かけていたためのものである。

なお、三十八年の金沢における香国と王治本との交遊に関しては、上述の記事に次のような記載があるので、ここで引用しておきたい。

三十八年、予が金沢の清佳書屋に隱棲したるとき、君来て友人細野燕臺の希仙閣に滞在したりしかば、燕臺始め大西金陽、荻野迦陵、の諸詞友と共に、詩酒徵逐幾むと寧日なかりき、（中略）君は往年土佐に遊び、予が岳翁故細川錦浦と交最も善く、曾て金沢に在りし時は、予が書屋に來りて内子に向ひ、尊父とは年齢か幾許差へり、今、世に在らば、さぞ榮きことならん杯、打語られたるが、（以下略）

王治本が土佐に遊んだのは、十九年春から夏にかけてのことで、その間の細川錦浦との交流については、拙稿「明治期高知における日中文人の交流―旅の詩人王治本を中心として―」⁵⁰を参照されたい。

ところで、「雅集」が催された希仙閣について王治本が書いた「記」があり（三十八年十月四日の『北國新聞』所載）、その中に閣の主である細野申三の人となり描かれている。その部分を中心に、挙げておきたい。

希仙閣記 王泰園

（前略）觀申三為人、丰神淡蕩、有仙姿焉。品格清奇、有仙骨焉。詩思妍麗、有仙心焉。（中略）閣曰希仙、洵得其真矣。今者余重游燕臺、仮寓於此閣、晨夕盤桓、見其花木盈庭、圖書滿架、藉得欣賞仙境、領畧仙趣。殆疑此閣、即蓬萊之仙閣。余不幾亦或為神仙中人乎。彼徐市等人海而不獲一至者。余今得日坐此仙閣中。幸何如之。（申三の人となりを觀るに、丰神淡蕩として、仙姿有り。品格清奇にして、仙骨有り。詩思妍麗にして、仙心有り。（中略）閣を希仙と曰うは、洵に其の真を得たり。今者余重ねて燕臺に遊び、此の閣に仮寓し、晨夕盤桓して、其の花木、庭に盈ち、圖書、架に滿つるを見て、藉りて仙境を欣賞し、仙趣を領畧するを得たり。殆ど疑うらくは此の閣は、即ち蓬萊の仙閣ならんか。余も亦或は神仙中の人と為るに幾からざらんか。彼の徐市等は海に入るも一たびも至るを獲ざりしならん。余今日に此の仙閣中に坐するを得たり。幸い何か之に如かん。⁵¹）

四、五柳舍雅集 九月十三日 中秋節

九月十五日の『北國新聞』に「五柳舍雅集」という見出しの下、次のような記事が載っている。

「昨日午後五時より晁水⁵²五柳舍に於て山田天籟氏（横浜火災連送信用保険会社金沢支店長）主人となり滯沢中の王泰園詞宗并靈沢吟社諸同人を招き中秋觀月の雅筵を開きたるが概に応じ参会せし者二十餘名にして坐定るや主人天籟氏、覃韻七律二首を坐客に示し賡韻を需めたり須臾にして泰園詞宗の詩先づ成り諸同人之に次ぐ斯くて酒宴に移り更らに傲栢梁体を作し酒三

巡、唱和続出満座興酣なる頃雲翳梢散じ嬌娥嬋娟、席に待するの老妓亦た詩吟を解し音調朗々たり是に於て主客益々興に乗じ太白満引、何れも詩百篇⁵³の概ありき此の如き華延は近來の盛事に属し群仙相携へ酔脚蹢躅として三更の月を踏み歸去來を

歌ひたりとぞ

記事中に見える「靈沢吟社」は、土居香国によれば、木蘇岐山（一八五七—一九一六）が金沢に住んでいた時に創設したものであるが、その後衰滅しかけていたようで、香国が三十八年に金沢に隠棲するようになった時、既に富山に去っていた岐山の後を受けて、「同吟社の諸君と俱に再興を謀り、時々雅会を催したることありしが、当時の社員は十四五人計り」であつたという⁵⁴。この中秋節、九月十三日に山田天籟宅で催された宴で詠まれた作品が、『北國新聞』に以後数回に分けて掲載されている。それらのうち、いくつかを挙げてみよう。

まず九月二十日の漢詩文欄の筆頭には、王治本の序が載っている。その内容は、「夫事之求而即得者、不如求之遲遲而始得者之為案尤真也。（夫れ事の求めて即ち得る者は、之を求めて遲遲として始めて得る者の樂しと為すこと尤も真なるに如かざるなり。）」という書き出しで、そのことが月見の際の天候にも当てはまるとして、以下、次のように述べている。

方当肴核初陳、簾幕高捲、諸友皆倚檻以望、举杯以待、而山色濛濛、泉声汨汨、浮雲掩映、皓月不來、諸友感情懷鬱鬱、形諸詩歌、以為天公之敗乃興也。迨更深夜人靜、雲破月來、清光如昼、

萬籟無声。古人云、明月送人歸。其始為我言乎。益知月之遲遲而放光者、正天之助我以欲焉。余因有感於此、特作斯語、質諸同游諸君。以為何如。是為序。〔肴核 初めて陳ねられ、簾幕高く捲かれ、諸友 皆 檻に倚りて以て望み、杯を挙げて以て待つに方當りて、山色濛濛、泉声汨汨として、浮雲 掩映し、皓月 来らず、諸友感情懷鬱鬱として、これを詩歌に形し、以て天公の乃が興を敗ると為す。更深く人靜まるに迫んで、雲破れて月來り、清光 昼の如く、萬籟無し。古人云う、「明月 人の歸るを送る」⁵⁵と。其れ殆ど我が為に言えるか。益ます知る 月の遲遲として光を放つは、正に天の我を助けて以て欲はしむるなりと。余此れに感ずる有るに因り、特に斯の語を作り、これを同游の諸君に質さん。以て何如と為すや。是れを序と為す。〕

乙巳中秋 奎園老人王治本

次に載るのは天籟の「乙巳中秋邀飲同人于梧裏亭賞月酒間賦此索和」二首であるが、第二首のみ挙げることにしよう。

向午陰雲鎖碧潭 向午（昼頃）陰雲 碧潭を鎖せり
更欣到夜放晴嵐 更^{かえ}つて欣ぶ 夜に到りて晴嵐（晴れた日の山

上のかすみ）放たるを

滿江月色秋方半 江に満つる月色 秋 方に半ばに
盈座琴声醉正酣 座に盈つる琴声 酔い正に酣なり
倚檻懷人天各一方 檻に倚りて人を懷う 天の各一（それぞれ

臨流把釣影成三 流れに臨み釣を把れば 影 三と成る
明年佳節游何地 明年の佳節 何れの地にか游ばん

颯泊由來北又南 颯泊 由來 北又南

第五句には「指香国」との自注がある。やはり、靈沢吟社にとつて、また王治本にとつても重要人物である香国が参加していないことを残念に思っているのである⁵⁶。第六句は、李白「月下独酌」の「举杯邀明月、对影成三人」をもじった表現か。
九月二十一日には、これに次韻した王治本の作四首が載っているが、第二首と第四首を挙げることにしよう。

次韻 王泰園

泉声汨々瀉清潭	泉声 汨々 清潭に瀉ぎ
樹影疎々散夕嵐	樹影 疎々として 夕嵐（夕霧）散ず
飽看蟾輝無片翳	飽くまで看たり 蟾輝 片翳無きを
欣聽鶴唳助餘酣	欣び聴けり 鶴唳 餘酣を助くるを
來朋合坐逢双五	來朋 合坐（出席者合計） 双五（十人）に逢い
新曆今宵是十三	新曆 今宵は 是れ十三
料識天涯同一色	料り識る 天涯 同じく一色
借將醉夢到江南	醉夢を借りて 江南に到らん

浅水橋辺水滿潭	浅水（浅野川）橋辺 水 潭に満ち
蕭疏野樹鎖寒風	蕭疏たる野樹 寒風に鎖さる
一行雁影霜華冷	一行の雁影 霜華 冷たく
幾処螢光夜色酣	幾処の螢光 夜色 酣なり
遙々東海程經萬	遙々たる東海 程 萬を経たり

瑟瑟西風秋已三^マ 瑟瑟たる西風 秋 已に三（九月ということか）
功名畢竟成何用 功名 畢竟 何の用をか成さん
老感渾同陸劍南⁵⁷ 老いて感ずるは 渾て陸劍南に同じ

九月二十三日には、山原晚翠、広岡尾山、大西金陽、佐々木魁心の次韻の作が載っている。判読しがたい字の多い金陽の作は省き、他を挙げることにしよう。

次韻 山原晚翠

江上旗亭傍碧潭	江上の旗亭 碧潭に傍い
一竿紅旆映晴嵐	一竿の紅旆 晴嵐に映ず
秋逢佳節秋將老	秋 佳節に逢うや 秋 將に老いんとし
会以斯文会倍酣	会するに斯文（漢詩文の意か）を以てして 会 倍ます酣なり
茅屋芝門揚植五 ^マ	茅屋 芝門 揚植うること五
古松衰菊徑開三	古松 衰菊 徑開くこと三 ⁵⁸
興來呼酒憑欄角	興來り酒を呼びて 欄角に憑れば
月走西東水北南	月は西東に走り 水は北南

山原晚翠については、『金城新誌』第十八号（十八年）所載の作「金城雜詩 折四」に「晚翠 山原成太郎（金沢）」とあるのににより、その名が知られる。二十二年の第一回市會議員選挙で当選し、その後、県會議員も務めた人物である⁵⁹。

同 広岡尾山

中秋待月向江潭
 欲雨前山帶夕嵐
 未定陰晴成句懶
 且憑談笑對樽酣
 良游此夕誇無雨
 罰酒吾人願受三
 何事素娥妬詩客
 幾回々首望樓南

中秋 月を江潭に待てば
 雨ふらんと欲して 前山 夕嵐を帶ぶ
 未だ陰晴定まらず 句を成すこと懶し
 且く談笑に憑せ 樽に対して酣なり
 良游 此の夕べ 雨無きを誇り
 罰酒 吾人 三を受けんことを願う⁶⁰
 何事ぞ素娥 詩客を妬む
 幾回か首を々らして 樓南を望みしならん

同 佐々木魁心

蘆花荻葉滿晴潭
 山色侵樓滴翠嵐
 澗月影清秋已半
 水禽声断夜方酣
 同盟悉比賢人七
 連榻相逢益友三
 剩有絃歌添酒興
 未遑遊覽到橋南

蘆花 荻葉 晴潭に満ち
 山色 樓を侵して 翠嵐滴る
 澗月 影清くして 秋已に半ば^{すで}
 水禽 声断えて 夜方に酣なり
 同盟 悉く比す 賢人七
 連榻 相逢う 益友三
 剩え絃歌の酒興に添うる有り
 未だ遊覽して橋南に到るに遑あらず

十月十二日にも、以上の諸作と同韻の浦井春湖の「中秋賞月次王
 黍園韻」と題する作が載っているが、判読しがたい字がいくつかあ
 るので、引用はしない。人物については、筆者が調べた限りでは、
 信がその名で、三重県が原籍、七年前、文部直轄大阪師範学校の
 数学の教師、二十二年ごろには滋賀県商業学校教員、その後、遅く
 とも二十九年ごろから金沢の第四高等学校の講師を務め、三十四

年二月ごろまでには退職して名古屋に隠居したということになる⁶¹
 が、三十八年ごろには再び金沢にいたわけである。

おわりに

以上、本稿では三十八年九月、王治本の金沢滞在時の詩文交流を
 跡付けてみた。以後、この年の年末までの足跡と詩文交流について
 は、一括して次稿で取り上げることにした。

(しばた・きよつぐ 本学教授)

注

- 1 十五、十六年のこの地域における詩文交流については、拙稿「明治十五年
 王治本の旅と詩文交流―旅立ちから東海道を経て越前滞在まで―」(『武庫
 川国文』第八十号、二〇一六年)及び「王治本 明治十五、六年の北陸漫
 遊と詩文交流―加賀・越中・能登・越前―」(『日本語日本文学論叢』第十二
 号、二〇一六年三月)で紹介した。
- 2 さねとうけいしゅう「王治本の金沢での筆談」(同氏『近代日中交渉史話』、
 春秋社、一九七三年)一七四、一七五頁。
- 3 牧孝治「加賀の茶道」(北国出版社、一九八三年)四十九頁。
- 4 近藤修之助編輯兼発行『明治医家列伝』第四編(二十七年)所収「佐々木
 秀三郎先生之伝」。
- 5 その証左としては、十一年三月の『東洋新報』第三十二号に王の「贈栗園
 浅田仁翁大人」と題する詩が載っており、また、宗伯の婿養子である浅田
 宗叔の編輯兼出版に成る『杏壇餘芳』(十五年四月)には、宗伯の治療に
 感謝する王の作品も載っている。
- 6 後引の三十八年九月十五日の『北國新聞』所載の山田天頼「希仙閣雅集卷
 跋」に「小池梅所・佐々木魁心・大西金陽、皆当年旧雨也」とある。

7 金沢市玉川図書館近世史料館、金陽文庫特二〇〇〇、佐々木義祥（魁心）「帰韻三十韻、魁心二十八字詩附淡水集」。

8 多留淳文「北陸における浅田宗伯の門流―佐々木秀三郎の事蹟―」、『漢方の臨床』第三十七卷第九号、一九九〇年。

9 残念ながら、「蓮沼茶山」は解することができない。

10 細野申三は「燕臺」の号を以て称されることが多いが、この「春鷹」もその号の一つであったのだろう。

11 「葵向」は和製漢語かもしれない。『日本国語大辞典』第四卷六十一頁に「前略」転じて、君主や目上の人を慕い仰ぐこととの釈義がある。

12 『百花欄』第十一集、三十六年十一月二十五日。

13 『經受雜誌』第一編（十六年九月十日）所収。

14 なお、「王母広道孺人墓表」で、天籟は自らを「善」と称している。「善」が通称（幼名）だったようである。

15 『太陽』第十四卷第十二号（四十一年十一月一日）「文苑」所載。

16 天籟の祖父と父については、三十九年四月二十五日の『政教新聞』「文苑」所載の天籟自身の「先大父從五位下朝散大夫志摩守山田府君墓誌」に「大父諱重歳、称清之助、晚更稱翁。（中略）世仕徳川幕府。（中略）大父（中略）掛冠後、世局一變、遂專意謀富国之業、為旭銀行頭取（中略）遂以明治戊子十二月六日卒、（中略）子男一人、曰重固、即重光之父」とあるのが参考になる。

17 深浦重光（龍江）『龍江文集』上巻、門下生二同、一九二二年。

18 後引の九月十五日の『北國新聞』の「五柳舎雅集」と題する記事に天籟の当時の肩書を「横浜火災連送信用保険会社金沢支店長」とするのに一応抱つたうえで、「連」を「運」の誤りと見なして、こう記した。

19 「秋尽」の第一句、「奉侍殿大夫」の第一句、「秋尽」の第七句、「登高」の第八句から成る。

20 『政教新聞』三十八年八月二十七日「文苑」所載の天籟の文「鳳山精舍雅

集詩巻序」に「去年予来金沢」とあるのと、同紙三十九年六月十五日の「文苑」に天籟の「丙午夏将去金沢留別諸友」と題する詩が載っているのに拠る。

21 このような文脈における「九日」は、ふつう「農曆九月九日重陽節」を指す（『漢語大詞典』第一卷七二九頁）が、この年の陰曆九月九日は、陽曆の十月七日で、この希仙閣雅集が催された九月六日のほぼ一か月後になる。ここは陽曆の九月九日と見なさざるを得ないようである。

22 稲葉昭二「郁達夫―その青春と詩」（東方書店、一九八二年）六十四頁。

23 『漢語大詞典』第一卷三三九頁「三槐」の項。

24 もっとも、末句には「時間東京有紛擾之警故及之（時に東京に紛擾の警有るを聞く。故に之に及べり）」という目注があり、喜びを満喫しようとする際に頭をかすめる、世情に対する不安の表明という形で締めくくられている。この年の九月五日、日比谷公園で行われた日露戦争の講和条約（ポーツマス条約）に反対する国民集会をきっかけに暴動が起こり、東京は無政府状態に陥った。いわゆる日比谷焼き討ち事件である。六日から二カ月弱の間、東京は戒厳令下に置かれることになった。

25 『北國新聞』の閲覧に当たっては、マイクロフィルム資料（石川県立図書館、金沢市玉川図書館等に所蔵）を利用した。

26 前掲拙稿「王治本 明治十五、六年の北陸漫遊と詩文交流―加賀・越中・能登・越前」六十一、七十二、七十三頁。

27 畑中榮「加越能詩作者略傳 その3「きくこ」、金沢高等学校総務部編『紀要』三十六号、二〇〇八年。

28 『百花欄』第二十二集、三十七年十月二十五日。

29 前掲拙稿「王治本 明治十五、六年の北陸漫遊と詩文交流―加賀・越中・能登・越前」六十一頁で若干の言及をしただけである。

30 広岡有久士親（尾山）『尾山詩稿』（一九二四年序）。

31 釈懷素（七二五―七八五）は唐代の僧で、書家。俗姓錢で、詩人として有名な錢起の甥。

32 この二首は『尾山詩稿』に「分韻得歌呈王漆園先生二首」という題で収録されており、そこでは「見重過」を「重相過」に作る。

33 後半は、南朝宋の劉義慶の『幽明錄』所載の〈後漢の劉晨と阮肇が天台山で仙女に会い、帰ってきたらずに晋の世になっていた〉という故事、及びこれを踏まえた唐の劉禹錫の「再遊玄都觀絶句」の「種桃道士掃何処、前度劉郎今又来」等の詩句を典故として用いた表現。

34 「采芝歌」は、乱世を避けて商山に入った秦代の隠士、いわゆる「商山四皓」が歌ったという采芝操のことだろう。

35 陸放翁（一一二五—一二〇）は、享年八十五歳だった。

36 前掲拙稿「王治本 明治十五、六年の北陸漫遊と詩文交流―加賀・越中・能登・越前」七十二頁。

37 この「重陽」も、陽暦の九月九日が意識されているようである。

38 「北國新聞」マイクロフィルム資料の不鮮明で判読しがたい文字を「●」で示すことにする。以下、同じ。

39 『漢語大詞典』第九卷一九六頁。

40 第四句の典故となる作は、韋応物ではなく劉禹錫の「再遊玄都觀絶句」である。また、劉詩は「復」を「又」に作る。その他の句の典故となる作品の題を示せば、順に「蜀中九日」、「九日登仙臺呈劉明府」、「曲江春感」（一題作「婦五湖」）、「登高」、「送王十八歸山、寄題仙遊寺」、「地球樂」、「望天門山」、「聽角思婦」となる。

41 五香屋休哉（一八六三—一九一九）については、細野や徳田と小学校で同級で、後に住友財閥の総帥となる小倉正恒（一八七五—一九六二）著『小倉正恒談叢』（好古庵、一九五五年）所収「6 五香屋休哉翁」に詳しい。

42 徳田秋声が一九三八年に書いた「灰皿」、「秋声全集」第十八冊（臨川書店、一九七五年）二九九—二四〇頁。

43 北室南苑氏はその著『雅遊人 細野燕台 魯山人を世に出した文人の生涯』（里文出版、一九九七年）の中で、大正四年、福田大観（後の北大路魯山人）

を自宅に住まわせることになったころの細野燕台について、「金沢において実業家として、また漢学者、茶人、古美術愛好家、美食家、書家等、実に多彩な面を持っていた人で、趣味人の間では知らない者はいなかった」と述べておられる（十一頁）。

44 この「重陽」も、陽暦の九月九日となる。

45 この「商」は「高」の誤りと思われる。

46 参考までに中国の先行作品における類似句を挙げておこう。前掲第一句—沈佺期「夏晚寓直省中」詩の「高樹早涼暉」。同第八句—陸游「道中累日不肉食至西果市中得羊因小酌」詩の「頽然就醉昏」。後掲第八句は、王勃「滕王閣詩序」に同じ句がある。

47 耆卿は麗麗な作風で知られる北宋の詞人、柳永の字。

48 加納粹軒「土居香国」（『土佐史壇』第十二号、一九二四年）、石川県「石川県史 現代篇（2）」（一九六三年）一一五—一一五三頁、神田喜一郎編『明治漢詩文集』（筑摩書房明治文学全集62、一九八三年）四二五頁、「高知県人名事典 新版」刊行委員会編「高知県人名事典 新版」（高知新聞社、一九九九年）五一—五三頁等。

49 『随鳴集』第四十四編、四十一年八月五日。

50 柴田清雄・蔦海波「明治期高知における日中文人の交流―旅の詩人王治本を中心として―」（『日本語日本文学論叢』第七号、二〇一二年）。

51 「丰神淡蕩」は、その漂わせる雰囲気があつさり、かつのんびりとしていくこと。「盤桓」は「歩き回る」意。

52 「晁水」は浅野川のことかと思われる。

53 「太白満引、何れも詩百篇」は、杜甫「飲中八仙歌」の「李白一斗詩百篇」に基づいた表現。「太白」は李白の字、「満引」は酒を十分に飲む意。

54 『随鳴集』第四十五編（四十一年九月五日）「風雅餘誌」所載の「古越吟社」と題する記事。なお、小倉正恒の「岐山先生事略」（木蘇岐山著、石野徹註、小倉正恒校刊『五千巻堂集』巻頭所収、小倉正恒、一九三五年。ま

た、前掲の『小倉正恆談叢』にも「木蘇岐山先生事略」として収載）によれば、岐山が金沢に住むようになったのは二十七年ごろ、富山へ去ったのは三十三年ごろと見られる。

55 宋末元初の甘泳の「与危見心同和完顔御史沂聯歩踏月韻」詩に「明月送人帰、明月照人宿」とある。

56 なお、天籟個人にとっても、香国は同時期に台湾で勤務した馴染みがあった。天籟の生年等が載る上述の『百花欄』第十一集所載の彼の作品は、「送土居香国之西京」と題する七絶で、「憶昨談心臺北城、驪歌重唱暗愁生」という詩句で始まる。

57 この句には「放翁有「功名富貴成何事」句」との自注がある。

58 頸聯は各句、陶淵明の故事を踏まえた表現。

59 石林文吉『石川百年史』（石川県公民館連合会、一九七二年）に拠る。

60 本句は、詩のできぬ者が罰として酒三斗を飲まされたという「金谷酒数」の故事を踏まえた表現。

61 金沢の第四高等学校北辰会発行の『北辰会雑誌』第十号（二十九年四月三十日）から第十八号（三十二年二月十日）にかけて、漢詩文学作品が載り、そのうち、第十七号では「浦井信講師」との肩書が記されている。二十二年十二月二十七日発行の『江州郷友会雑誌』第六号に漢詩が載り、かつ会員名簿の「地方之部新新入会（自十一月廿四日至十二月十四日）」に三重を原籍とする滋賀県商業学校教員として記載されている。「書生千秋会堂萬歳」と題する文章（『数理会堂』第十一号、二十二年十一月十日）において、七年ごろ、文部直轄大阪師範学校に在任していたことを述べており、また、この文章での肩書は滋賀県商業学校教員となっている。三十四年二月五日発行の『新詩綜』十二集に作品が載り、作者浦井について「柳城者旧、曾在第四高等黉、与秋蘋交善」とある。「柳城」は名古屋のこと。秋蘋は金井雄（一八六四—一九〇五）で、かつて四高の講師を務めた。